

「四山鉱閉鎖」ではない

中央生産会議の質疑応答から

前号で上期(四～九月)中央生産会議の要旨を伝えましたが、以下は会場の質疑応答の要約です。

質疑 三池炭鉱の中・長期の生産計画および人員計画について。
回答 石炭情勢に不透明な点が多く、中・長期の計画を明示することは困難。従来どおり六十二年上期の提案を、(注・さき)の合理化提案では、大綱的な五年間の生産・人員計画が出された。質問 四山鉱閉鎖までの具体的な計画について。

回答 会社は「閉鎖」とは考えていない。四山区域の埋蔵量はあり、坑口を開けるわけでもない。三川鉱と統合し、第一坑とする組織上の問題であり、情勢しだいでは再開の可能性もある。四山鉱が完全になくなることはない。

質疑 三井炭鉱の、職名変更など具体的には希望退職のメドがつきだえませんが、以下は会場の質疑応答の要約です。

質疑 基本的な考え方は合理化提案で示している。大型化への移行は諸条件などを十分検討しながら取り組んでいく。集約化は今年から生産構造の広がり過ぎなどを改め、労働強化による個人能率の向上を考えている。コンパクト化することで保安面でも向上すると考えている。

質疑 五月末現在で二百六十九万七千トン(買付炭、預り炭を含む)であり、現状のまま推移すれば現有貯炭場では窮乏になる。質問 貯炭管理会社による貯炭買い上げ実績と、今後の見通しについて。

回答 四月、五月に全国で二百六十万トンの買い上げのうち、三池炭は約六〇〇万の百五十七万三千トンで、二百三十八億三千三百万円となっている。七月には全国で四十万トン(内、三池炭二十四万トン)の買い上げ計画がある。

質疑 水道一元化について。
回答 水道一元化については、問題点を整理し対立協議をする。五十九年に社宅計画を作ったが、六十年度の財政対策、六十一年度の九州事業所設立で立ち消えとなった。現在検討中であり、近く提示したい。

質疑 三井病院の今後の計画について。
回答 三井病院の今後の計画については前号(既報)雇用問題については努力しているが、まだ基礎整理の段階である。その他(略)

二鉱体制への「つなぎ」

四山鉱生産会議で

六月二十四日、四山鉱としての最後の生産会議が開かれました。六十二年上期の生産会議です。三池炭と四山鉱の統合による二鉱体制への「つなぎ」の役割を担う。三池炭と四山鉱の統合による二鉱体制への「つなぎ」の役割を担う。三池炭と四山鉱の統合による二鉱体制への「つなぎ」の役割を担う。

てんやわんや

配転騒動の四山鉱

四山鉱ではさきにおこなわれた希望退職募集で百七十一人が退職(計画どおり)が決まり、三川鉱へは百三十三人の計画に対して約九十人、有明鉱へは百六十人の計画に対して約六十人、希望者があふれている。三川鉱と有明鉱への配転希望者があふれている。三川鉱と有明鉱への配転希望者があふれている。

総評解体に反対

国労が方針

国労(六本木支部委員長)は六月十六日、九月に開かれる全国大会を前に東京本部で拡大中央委員会を開き、国鉄の分割・民営化後も続く「国労つぶし」と対決し、「雇用と組織と権利を守るため徹底して闘い抜く」との態度を確認するとともに、焦点となっている労働戦線の統一問題について、「全労連に反対し、総評の解体を許さず、総評路線の継承・発展を目指す」との方針を決めた。今秋の全労連(連合)発足に向け労働界の準備が進む中、労働問題でも国労の動向が今後の注目を浴びることになりそうだ。



昨年、三井不動産は米国ニューヨーク市マンハッタンにある地上五十四階、地下三階建ての「エクソン・ビル」を買収した。取得金額は約一千億円。

日本の大企業が、円高・ドル安につけ込んで世界各国で土地や建物を買いあさっているのは周知の事実。「カネ余り」現象を象徴するものだが、それが三井グループであることに注目したい。

さらに、今年に入って三井物産が「九州アジアランド」構想を明らかにした。荒尾・大牟田を中心に文化・技術交流、物流の拠点を建設するもので、ポスト石炭をにらみ三井の施設、遊休地を最大限に活用する方針だ。

三井グループの責任。ここでも数十億円の投資だ。すでに三池炭所では倉庫などの改修に入っている。この問題では、同じ三井グループの三井東洋化学との間で、「生き残り策」(港務所)と

「肥後部門の壊滅」(東庄)だと、骨肉の争いも起きている。また、三井鉱山は世界最大の穀物メジャー、カーギルの肥後繁華街、東新町にある三池製作所の跡地に、三井病院を移設し、商業施設やスポーツ施設を建設する構想を固めている。

切実な地元の声も聞かず、企業の「生き残り」だけを優先させようというのだろうか。やがて、三井の三池進出から百年を迎えるが、その発展をもたらした発祥の地、いまほとんど三井グループの責任と、その対応がきびしく問われている時はない。

「本人の意思を尊重せよ」「半強制的な配転はするな」「保安は大丈夫か」と、配転をめぐる「てんやわんや」の火種が燃えている。

「てんやわんや」の火種が燃えている。三井グループの責任と、その対応がきびしく問われている時はない。



「今こそ築こう明るい四山鉱」のスローガンの下をくぐる労働者の足どりも重そうだ。